

靖国参拝へ

の対応に表れる

その国の“大人度”

伊藤 澄夫

伊藤製作所社長
中京大学特別栄誉客員教授

この原稿を書いている9月15日、ちまたでは次期総理大臣候補の話題で持ち切りだ。テレビでは河野氏と岸田氏がリードし、高市氏は後れをとっているとの報道が主。一方、ネットでは何ゆえか、圧倒的に高市氏の評価が高い。現時点では次期総理予想が立たず、興味深い選挙として見守りたい。

私は主な政治家をほぼ知っているつもりだったが、高市氏に大きな印象は無かった。昨日テレビの記者会見を全て拝聴したが、自分の口で述べた高市氏の理念や抱負は立派な内容であり、きらりと光るものがあった。また、意地悪と思えるような女性記者からの質問には顔色を変えずその考え方を完璧に論破し、質問した記者の立場が悪くなるほどの弁舌だった。

この記者会見は世界中に広まっただろうが、隣国からの反応が予想通り大きかった。高市氏は極右の政治家と思われており、総理になってほしくないようだ。

相互の国が経済をうまく進めるためには刺激的な言動は良くないといった考え方は理解できる。し

家の重鎮が参拝してもよいのか?」と、例の新聞社から記事が配信されたのは85年だった。戦後からそれまでの40年間、靖国参拝に海外からの苦情は何一つ無かったが、この新聞がきっかけとなり中韓は参拝にクレームをつけだした。

これに対し、「宗教と信仰の自由である」と言い返して参拝を続けたとしても、欧米諸国からは理解されなかった。ましてそのころの中国は、日本からの技術や資本の移転をありがたく思っていた時期であったはず。しかし残念ながら当時の中曽根総理は翌年から参拝を中止した。

中曽根氏のこの行動に、中国は「これは外交カードに使えるぞ」と内心大喜びしたはずだ。現在の中国は多くの分野で力をつけてきたが、当時はこんなことがカードになるほど、中国には日本に仕掛ける優位点が無かったのだろう。

あの戦争では朝鮮半島の20万人近くが日本軍に志願し、共に戦い戦死した朝鮮人も靖国に祭られている。近年、韓国から戦犯国家とか戦犯企業という発言が多くなり、

かし、高市氏の会見内容に対する欧米諸国や多くの国の感想は、右翼や極右ではなく中道なのだ。対して隣国と自国のマスコミは近年、実質以上に右左に分けたがる傾向にある。しかし、現在の日本の政治家に極右はいないだろう。

韓国民は、日本の政治家が「竹島はわが領土」と言えば、その政治家を「極右だ」と言う。一方、韓国の代議士が「独島はわが領土」と言えば、「良い政治家だ」と言う。「領土や領海、領空を守り日本の経済を強くし、国民が幸せになるように尽くしたい」と、国土と思われような理念を持つ国家のリーダーを引き降ろそうとする国民やマスコミ、政治家が他国にいるだろうか。世界的には高市氏の理念は、国家元首にふさわしいと評価されるだろう。

ある記者の質問に靖国参拝があったが、高市氏は総理になっても信仰の自由で今後も続けると語った。総理大臣候補では過去には無い発言だ。そこで今回は靖国神社参拝について、過去からのいきさつを述べたい。

「日本はアジア諸国を占領し迷惑をかけた今も嫌われている」と韓国は言う。しかし、日本軍が戦った相手はフィリピン、米軍、インドネシアのオランダ軍、シンガポール、マレーシア、インドの英国軍だ。戦争を仕掛けた日本軍側に被害が大きかったことは当然だが、欧米諸国の国々の兵士にも大きな犠牲が出た。

その欧米諸国が日本を今も敵国とみなし、靖国神社参拝にクレームをつけていけば、高市氏といえども参拝することはできないだろう。しかし宗教と信仰の自由という理念は世界中に広まっており、過去には敵国であった欧米諸国からのクレームは、今後も基本的には出ることはないだろう。

オバマ政権、副大統領であったバイデンが安倍総理の靖国参拝に「失望した」と発言したが、これは当時バイデンが中国と親しい関係にあったことと、これ以上日韓が不仲にならないための判断だったのだ。もし高市氏が総理になった場合、靖国参拝に対して大統領となったバイデンがどのような表明

クレームは途中から

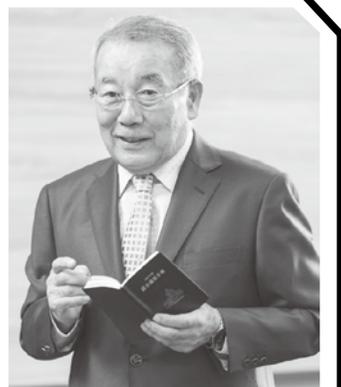
敗戦で焦土化した日本が、それからわずか19年でオリンピックを開催し、新幹線を走らせ、高速道路も開通させた。これがうらやましく、「敗戦国のくせに」と考えていた隣国の気分を害したのだろう。

その後70年代に入り、わが国の工業製品は品質と価格で世界の頂点に立った。洪水のように世界各国に輸出し外貨をかき集めた80年代半ばから、米国の有名なビルや企業などを派手に買収し米国の響（ひび）を買ったのは、確かに行き過ぎていた。また東京都だけの土地価格で全米が買えると言われたほどのバブルともなった。結果、米国はスーパースーパー301条などの法律を作って日本に対して高い関税を掛け、半導体生産を韓国に移転するように仕掛けた。当時の日本は、世界中から響（ひび）を買うほどの勢いだったのだ。

隣国では短期間で急成長した日本に対して、何とか上に立ちたいと考えていただろう。そんな折「戦犯が祭られている靖国神社に国

をするか注視したい。

高市氏は靖国参拝を外交の問題と捉えることは良くないと述べた。中国の周辺国に対する数々の横暴を、各国が非難している。中国が靖国問題に対して大人の対応をすれば、各国から中国に対する評価が上がるのではないだろうか。



いとう・すみお

1965年立命館大学経営学部を卒業後、伊藤製作所に入社。1986年同社代表取締役就任、現在に至る。順送り金型メーカーの老舗企業であり、国際競争力のある金型製造技術の確立に努め、無人化、高速化、精密化を追求したプレス加工で卓越した技術力を誇る。
(社)日本金型工業会・副会長・国際委員長を歴任。中京大学特別栄誉客員教授、国立ソウル科学技術大学校名譽教授、神戸大学非常勤講師などを務めて後進の育成に寄与。2017年4月「旭日単光章」、21年1月「紺綬褒章」受章。著書に『モノづくりこそニッポンの砦』『ニッポンのスゴい親父力経営』『日本製造業の後退は天下の一大事』がある。